

編集後記

コンピューター (PC) 相手に将棋をさすことがある。いわゆるへぼ将棋というもので、初級中レベル以上では歯が立たない。人間相手では待ったもあるが、コンピューター相手では融通が利かず、味気もない。ところが、時に PC も考え、次の一手に時間がかかる。そのときはこちらが優勢なときで、なんとなくうれしい気持ちとなる。

テレビの将棋番組もときどき見る。とくに、日曜日昼前の将棋は楽しみの一つである。考える時間が限られており、次の一手までの緊迫感がたまらない。特に面白いのは大逆転である。劣勢の場面から起死回生の一手が生まれ、瞬く間に場が変化していく。劣勢の局面でも、棋士たちは冷静に判断をして、最後の一手まで予断を許さない。プロ棋士たる所以であるが、一手の先に無限の可能性が秘められている。

私たちは、日常の何気ない場面において、自分の経験をもとに判断をし、それが最良と思い込んで対処する。しかし、臨床の場において、さらによい手はないのか、新しい方法や考えがないのかを調べ、深く考察することが必要である。最近インターネットのお蔭で情報収集が以前と比べると格段に易くなったが、その中で、必要な情報を取捨選択しなくてはならない。この作業は論文を書くことで効率化できる。論文を書くことで、情報収集だけでなく、自分の考えをまとめ、他者の批判を受け、自分の立場を知ることとなる。私たち医師は、このような作業を通して、知識・経験を広く共有するという大変恵まれた環境で仕事をしている。

将棋の世界においても、情報化時代であり、これまでの棋譜や情報の分析なしに勝ち続けることは困難となった。羽生名人の『決断力』にこのような言葉があったので、紹介する。『最先端の将棋を避けると、勝負から逃げることになってしまう』

最先端の臨床とは、正確な情報の基に最良の医療を行うことである。そのためにも、質の良い論文を作成し、最新の幅広い知識を得ることが大切である。日本消化器外科学会雑誌には論文検索の大変便利な機能がある (ホームページ参照)。最新情報の糧として大いに活用していただきたい。

(山本雅一)